

本サービスにおける著作権および一切の権利はアイティメディア株式会社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスの出力結果を無断で複写・複製・転載・転用・頒布等を行うことは、法律で認められた場合を除き禁じます。

「英語に愛されないエンジニア」のための新行動論(1):

「海外で仕事をしたい」なんて一言も言っていない!

<http://eetimes.jp/ee/articles/1204/09/news002.html>

世の中にはいろいろな方がいますが、大きく2種類の人間に大別できます。「英語に愛される人間」と「英語に愛されない人間」です。

2012年04月09日 10時00分 更新

[江端智一, EE Times Japan]

われわれエンジニアは、エンジニアである以上、どのような形であれ、いずれ国外に追い出される……。いかに立ち向かうべきか!? → 「[『英語に愛されないエンジニア』のための新行動論](#)」連載一覧

中学から高校、大学、そして社会人になっても、今なお、私たちは、「必死に勉強すれば、なんだってできるのだ。英語だって例外じゃない」と言われ続けています。確かに、日々の激務の中から時間を捻出して、英語を身につけた方はいらっしゃいます。現実には、私はそのような人に出会ったことがあります。そして、数多くの成功体験談が、インターネットに溢れ、書店に書籍として積み上げられています。

しかし、そのような成功体験をしている人は驚くほど少ないように思います。私が出会った人の中でも数えるほどしかいません。その一方で、われわれ日本人が「英語学習」に費す時間やお金は、全世界的に見ても決して少なくありません。これは、各種の市場調査やデータからも明らかです。

あなたは、これを一度でも「おかしい」と思ったことはありませんか。そこで、私は連載のお誘いを受けた時に、ある1つの仮説を打ち立ててみました。「日本人には、英語の習得において詰まるところ2種類の人間しかいない。それは、『英語に愛される人間』と『英語に愛されない人間』である」と。

□

はじめまして。江端智一と申します。私は、典型的な「英語に愛されない人間」です。ある大手総合電機メーカーに入社後、20年間で経過した主任研究員です。これまでやってきた研究内容や分野は多岐にわたっています。最近の仕事からさかのぼってみると、

- ある製品やソリューションの海外展開の方法を検討したり、
- 日本全土で24時間運転している制御システムを、止めないまま新しいシステムに移行する方法を検討したり、
- 屋内や地下街の天井に取りつけられるGPS機能を開発したり、
- 携帯電話の広告配信サービス基盤を検討したり、などです。

この他、欧州の電話会社や米国の有名大学、



スイスの半導体モジュール企業との共同研究を担当したこともありまして。皆さんが、電車の中で無線LANを使って電子メールを送信できたなら、もしかしたら、私の特許発明が役に立っている可能性があります。

異色の研究としては、電子メールを未来や過去に送るという研究をしました。国内、海外の特許権として幾つか成立しています。世界中の誰にもまねができないと自信を持って語れる研究成果は、「電子レンジの2つのセンサだけで、サンマとサバを自動判別するアルゴリズムを開発した」ということでしょうか。これを人前で堂々と発表した時、聴講者が下を向いて震えながら「笑いをこらえていた」らしいです。



写真はイメージです

このようにさまざまな研究業務に合わせるかのように、海外出張の経験は、比較的多くありました。国際学会や海外の標準化団体の会合、海外の大学との共同研究の打ち合わせ、現地での業務など全部ひっくるめると、少なく見積もっても20回以上は海外に出張してきたと思います。出張先は、米国、イギリス、ドイツ、フランスと、あと2カ国くらいはあったはずです。さらに、家族を引きつれて米国に2年間赴任していました。コロラド州の大手通信機器メーカーと製品開発を共同でやってきました。

このように私には、私自身ですら驚くほどの、華々しい海外出張や海外赴任の経験があります。海外出張や海外赴任において、英語によるコミュニケーションは不可欠だというのが一般的な認識です。その私がなぜ、自分のことを「英語に愛されない人間」などと言わなければならないかについては、次回(第2回)に詳しくご説明致します。

この連載の対象読者は、エレクトロニクス分野のエンジニアの皆さんであって、現時点において「英語」との付き合いに支障を生じている若手の方に読んでいただきたいと考えております。「若手の方」とは、以下のような方を想定しております。

- 海外出張や海外赴任の経験が全く無いか、あるいは少ないと思っている方
- 業務や仕事の仕方については、ぼちぼちと山を超えて少し安心されている方

そして、これが大切なのですが、

- 「海外で仕事をしたい」なんてこれまで誰にも一言も言っていない方、また海外で仕事をしている自分を全くイメージできない方です。

なぜ、そのような「若手の方」に読んでいただきたいのか。世の中の悪い流れ全てが「若手の方」にロックオンして動いており、それが、不条理なくらい避けがたいものだからです。「若手の方」の最大にして最悪の弱みは、その「エンジニアとしての『余命の長さ』」にあります。

少子化問題、需要者への商品情報の氾濫、薄利多売の電機業界、日本のエレクトロニクス市場の縮小、アジアの安い労働コスト……。こ



これらの状況の全てが、私たちエンジニアを、日本から追い出そうとしています。

そして言語や文化も違うさまざまな国のさまざまなエンジニア、またはエンジニアの卵が、私たちの現場に放り込まれ、そして、私たち日本国内のエンジニア自身もまた、そのような者として海外の現場に送られ続けます。



写真はイメージです

そのようなエンジニアの中において、特にエンジニアとしての「余命」の長い「若手の方」は、最初の1回や2回は逃げる事ができたとしても、これからのエンジニア人生の全期間、全て逃げ切るのは不可能に近いと断言できます。そして、「逃げ切れない『あなた』」に対して「逃げ切った『上司たち』」には、あなたに伝授するスキルがありません。いわば、「若手の方」は、目隠しをしたままで海外の現場に放り出される「第1期生」なのです。

□

本連載は、「『海外で仕事をしたい』なんて一言も言っていない」のに、海外での仕事を命じられてしまった、ゆくゆくは命じられるであろう「あなた」に、

- これから海外の仕事でロクな目にあわないだろうこと
- それを回避する手段が「絶望的に存在しない」こと

を、ここできっちり認識していただいた上で、

- あわよくば、比較的「楽」ができるかもしれないかもしれない「技」をお伝えしたい

と考えております。そして、この連載が対象としない方は以下の通りです。

(1)「英語で困ったことは一度もない」、「英会話は日本人の常識だ」と考えている人は対象外です。私はあなたが嫌いです。

(2)この連載は、日本政府が期待しているような「国際コミュニケーション」の人材の育成を目的としません。特に、異種文化間の相互理解というような高尚なことには目もくれません。そんなことは、どこかの市民会館の文化セミナーでも聴講してください。

(3)この連載は、仕事が終わった後で、夜景の見えるバーでのきれいな外国のネーチャン、いかしたネーチャンとのちょっとハイソな会話を楽しむことを目的としません。油の臭いのする工場のラインで、現地のエンジニアと大声で怒鳴りながら仕事をする場面を想定します。

つまり、英会話学校の存在意義でもある「英会話能力の取得」を目的としません。絶対的な意味においてTOEICや英検のランク昇格は全く期待できません。むしろ逆です。「英語に愛されない人間」である私たちが、海外で「英会話をしないで」仕事をするための技術の1つの手段をご紹介します。

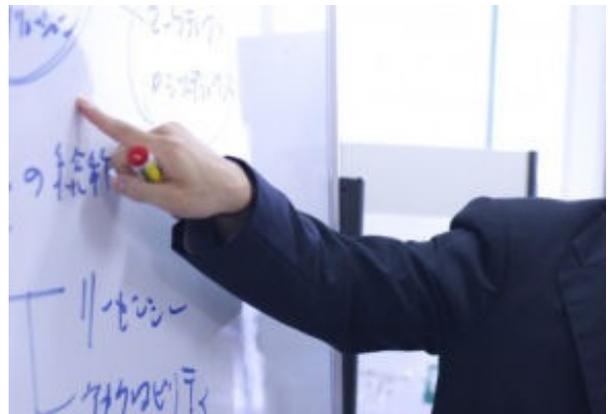
次回からは、「英語」に愛されない者は、何をしても愛されないという現実や、私たちエンジニ

アが「英語」と離別して生きていくことが許されていない理由を説明致します。そして、海外で仕事をするという現実、腹をくくっていただきたいと考えています。

次に、「英会話をする『すてきな』私」という思い込みを捨て、「入出力装置という『機械的な』私」という新しいパラダイムシフトに到達していただきます。加えて、「英会話コミュニケーション」というテーゼに対して「非英会話コミュニケーション」というアンチテーゼを提示します。

これらの実施例を、私の数多くの失敗のエピソードを交えながら、海外出張の準備から帰国までを、ケーススタディとしてご紹介致します。次回からお話する内容は、[私のWebサイト](#)の内容と、重複または矛盾する点が多くあります。また、この連載について、愉快でない内容が数多くあると思います。英語教育の業界の方を激怒させるであろうことは、今の段階で十分予想できます。

私はそのようなご意見やご批判を広く歓迎しませんが、私には、人から「面白いね」、「楽しいね」と、褒められることだけが好きな狭量(きょうりょう)な人間です。しかし、この連載は皆さんの意見を反映しながら作り上げていく、いわば「ご意見、ご批判連動型コラム」というものなのだそう(編集の方から教えてもらいました)。つまり、皆さんの意見を広くお伺いし、かみ砕き、反映していく必要があるのです。



写真はイメージです

そこで、提案です。「面白い」、「楽しい」、「愉快だ」、「もっと続けてくれ」という意見は、[私個人に山ほど送ってください](#)。そして「つまらん」、「不遜だ」、「ありふれている」、「さっさと止めろ」という、ご批判、苦情などは[編集部にご連絡ください](#)。編集部の皆さんは(現段階では)とても優しい方々とお見受け致しました。厳しいご批判や苦情の表現を、オブラートに包んで、優しく私に電話で伝えてくれる、と信じております。では、読者の皆さま、そして編集部の皆さま、これからお付き合いいただきたいと思います。よろしくお願い致します。

本連載は、毎月1回公開予定です。[アイティメディアID](#)の登録会員の皆さまは、下記のリンクから、連載が公開されたことをメールでお知らせする「連載アラート」に登録できます。



Profile

江端智一(えばたともち)

日本の大手総合電機メーカーの主任研究員。1991年に入社。「サンマとサバ」を2種類のセンサだけで判別するという電子レンジの食品自動判別アルゴリズムの発明を皮切りに、エンジン制御からネットワーク監視、無線ネットワーク、屋内GPS、鉄道システムまで幅広い分野の研究開発に携わる。

意外な視点から繰り出される特許発明には定評が高く、特許権に関して強いこだわりを持つ。特に熾烈(しれつ)を極めた海外特許庁との戦いにおいて、審査官を交代させるまで戦い抜いて特許査定を奪取した話は、今なお伝説として「本人」が語り継いでいる。共同研究のために赴任した米国での2年間の生活では、会話の1割の単語だけを拾って残りの9割を推測し、相手の言っている内容を理解しないで会話を強行するという希少な能力を獲得し、凱旋帰国。

私生活においては、辛辣(しんらつ)な切り口で語られるエッセイをWebサイト「[江端さんのホームページ](#)」で発表し続け、カルト的なファンから圧倒的な支持を得ている。また週末には、LANを敷設するために自宅の庭に穴を掘り、侵入検知センサを設置し、24時間体制のホームセキュリティシステムを構築することを趣味としている。このシステムは現在も拡張を続けており、その完成形態は「本人」も知らない。

本連載の内容は、個人の意見および見解であり、所属する組織を代表したものではありません。

関連リンク

[筆者の個人Webサイト「江端さんのホームページ」](#)

Copyright© 2016 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

